

メシクツタカ

太原正裕

学生のころ、自宅と大学が歩いて五分というめぐまれた環境であった。音楽系の部活動を熱心に行っていた私は、教科書などが入ったかばんを置き、楽器を持ってすぐ家を出るということが、たびたびあった。その頃、同居していた職人であった祖父が、仕事の手を休めいつも飛び出してきた私に「メシクツタカ」と聞いた。こちらも忙しく祖父への甘えもありつい、「うるさいなあ」と言ってしまうことも度々あった。しかし、たまに「食べていない」というと、「これ持って行け」とその頃既に珍しかったコッペパンを放つてよこした。「メシクツタカ」は祖父の口癖であった。

祖父は本来は建具職人であったが、手先が器用なのでどんな仕事もこなしていた。祖母が比較的早く他界したため、私が受験浪人中両親や兄が仕事で外出していると、家で仕事をしている祖父と私が二人で家にいるということが度々あった。その頃も、よく階下の仕事部屋から、二階で勉強している私に「メシクツタカ」と職人独特の大声で呼びかけ、二人でよく食事をした。たまたま隣が食堂であったので、二人で食べに行ったり、時には私がインスタントであるが、ラーメンを祖父の分まで作り、一緒に食べた。

「こたえらんねえなあ」

と喜び、職人仲間に孫がラーメンを作ってくれるとうれしそうに自慢をしていた。昔の職人であるから、若い頃は酒でも失敗し行動も破天荒なところがあったようだ。しかしなると言っても、職人の仲間が皆、ユニークであった。背中一面に刺青を入れたペンキ屋の大將、仕事はうまいが他人の家に上がりこんですぐ酒を飲みだしてしまう左官屋などなど、思い出深い。

中でも、子供の頃大笑いしたのが「お化けのトウさん」という職人さんだった。大工さんだったと思う。この「お化けのトウさん」は何が変わっていたか、少々説明がいる。当時、家の近くで普請があるとよく職人さんたちの仕事を見に行った。現場を指揮する棟梁のもとさまざまな職人さんが一緒にになり、一軒の家を作っていた。子供心に、その姿は頼もしく、粋に見えた。その光景は、壮観であった。時には簡単な作業を子供ながら手伝っていた。子供が砂場で使う「ふるい」と桁外れに違う、大きなふるいがあり、それで砂と石を分ける作業などを遊びながら手伝うなどしていた。お茶の時間など、職人さんに交じ

りお菓子をもらつてとても楽しかった。キセルで器用に一服するのを目を丸くして見ていた思いである。

ある時、棟梁が「弱ったよ、お化けのトウさんまたいなくなっちゃったよ」と叫んだ。祖父が「あじやー、またか」と頭を抱えた。話を聞くと、この大工のトウさん天才的な職人技を持ち、中でもカンナをかせせたら日本一と言われるほどであった。後にテレビ番組で木工機械で研磨した木と職人がカンナで削った木とどちらが平面に近い科学的に測定し対決する実験があった。その時はわずかの差で木工機械が勝ったが一緒に見ていた祖父は、「ちっ、お化けのトウさんが生きていれば、楽勝だ」とつぶやいていた。それほどの腕前を持つトウさんであるが、ある日、予告も無くしかも、仕事中に突然姿を消す、ということが頻繁にある人であった。二、三日すると何事もなかったように再び現れ、黙々と仕事を続ける。「どうしていたんだ」と仲間が聞くと、「日光に行つて、華嚴の滝を見ていた」と言う。最初にその話を聞いたときは、信じられなかったが、実際に目の当たりで起きたのである。やはり、二、三日してフラリと戻つてきた。その時祖父は詰問するわけでもなく、一言「メシクツタカ」と聞き、まだだと答えると棟梁に言つて昼休みにし、皆で、弁当を持ち寄り、トウさんにお裾分けしていた。ほかの職人仲間も何食わぬ顔をして食事をし、昼休みが終えるとトウさんと一緒に仕事を続けた。子供心にも、不思議な光景であった。後年、フラリと突然いなくなるある種の病気があると知り、あつ、おばけのトウさんこの病気だったんだと、一人合点し思い出し笑いをして周囲に気持ち悪がられた。

またこの頃は、必ず知的障害者の人も職人仲間にはいた。今にして思えば知的障害者だったのだなあとわかるのであるが、当時は子供の私にはよき遊び相手であった。それこそ、一緒になつて大型のふるいをふるい、いろいろな大工道具の使い方を教えてくれた。普通の人なら飽きてしまう単純作業を黙々とこなし、皆から重宝がられていた。木工所にも、そういう人が勤めていて、よく遊んでくれた。思い出すと涙が出てくる。祖父は、そういう人にも朝から「メシクツタカ」と聞いていた。その人たちは、母親から大事に持たされた弁当を嬉しそうに見せ、それを見た祖父は安心して仕事に取り掛かるのであった。

明治三十九年に生まれ、関東大震災のときは既に小僧として職人で働いていた祖父は、その後、第二次世界大戦と戦後の大変な時期を当然生き抜いている。年齢と身長の関係で、軍籍は無かったが、それでも大震災と、東京大空襲時に何度も死に掛けた、と話していた。その祖父からすると、何を聞いても大切なのが、「メシクツタカ」という質問だったのである。

今太閤ともてはやされ、最後は刑事被告人になってしまった田中角栄も、人に会うと相手がどんな金持ちでも開口一番「メシクツタカ」と聞いたそうである。秘書であった早坂茂三氏によると、やはり口癖であったとのこと。ぶっきらぼうに聞こえるが、自らが空腹のつらさ、切なさを痛切に知っているからこそその言葉であろう。言われた人は皆、感激したそうである。

不惑の年を過ぎ、この「メシクツタカ」の意味をわかったような気になっていた私に、それは大きな思い違いであると思ひ知らされたことがあった。二〇一一年三月一日の東日本大震災である。すべてを失い、報道で映像を見た我々被災地に離れた人間がショックを受けているのに、一番のショックを受けている被災者の方々が、暴動どころか非常に礼儀正しく、救援物資を辛抱強く待っていた。ある評論家が、秋葉原の無差別殺傷と同レベルの事象で亡くなった人の数が違うだけ、と無表情にコメントしていたがそれが正しいとは思えなかった。なぜなら被災者の多くは、地震と津波で人命のみならず、地域共同体、親類縁者、懐かしい故郷などすべてを失ってしまったからである。また、福島の原子力発電所の近くに住んでいた方々は戻る目途さえたっていない。私淑する作家・遠藤周作は再三「人生と生活は違う」と書いている。秋葉原の無差別殺傷事件は確かに大事件であり、被害にあった方々の生活は無になり、そのご親族の生活も無になってしまっただろう。しかし東日本大震災は、まず最初に「生活の次元」の共同体、懐かしい家、物理的な故郷、そして「心のふるさと」をも一度に失ってしまった。

私が現在研究しているキリスト教文学の師の一人で、哲学者のアルフォンス・デーケン神父は常々、「人間は何を持つかではなく、いかにあるか」が大事である、とおっしゃっている。被災者の方々は、「人間いかにあるか」を身をもって表現されていた。諸外国も、その態度に驚愕したのも記憶に新しい。あの被災地でのボランティア活動、復興支援で私も訪れる機会があったが、正直、私ならもっと取り乱したであろう。あの場所では、「メシクツタカ」と単刀直入には言うことができない。天皇陛下がお見舞いに行かれたときのように、「よく寝られますか、物資も少ないかと思えます、ご不自由ですがあと少しのご辛抱です」という言い方以外、方法がない。

しかし、私の勝手な思いかもしれないが、祖父の年代同士なら、「メシクツタカ」の一言ですべてを代弁したのではないか、と思う。その世代はもうこの世にいないが。東日本大震災や関東大震災、第二次世界大戦は、遠藤周作の言う「人生」の次元をも根こそぎ、我々から剥奪したのである。「メシクツタカ」の言葉の強く、重い意味が初めてわかった。

長引く平成不況、と言いながら他方、「銀座の猫も糖尿病」と言われるような飽食の時代でもある。若年失業者が増えたと言っても、ギリシアのように二〇歳代の失業率が六割という国に比べたらやはり経済大国である。もう、「メシクッタカ」が口癖の人は現れないだろうし、現れては困る。しかしながら、かつての日本は経済大国ではなかったが、お化けのトウさんが普通に働き、知的障害者の方々にも居場所があった。テレビ番組でセネガルの人が「セネガルは世界最貧国のひとつであるが、老後の心配など誰もしていない。家族が面倒をみる」と話していたのを聞いて、衝撃を受けた。セネガルのような国ではまだ「メシクッタカ」という言葉が重い意味を持つであろう。他方、日本では親が子を殺したり、子が親を殺したり、ご年長者が将来を悲観して自殺したりという報道が後を絶たない。自殺者三万人のうち、一貫して増え続けているのは男性の自殺者の数である。効率化を追い求め続けた結果、その効率化からはみ出した者、競走に敗れたと自分で思い込んだものが自殺という道を選択するのか。女性の場合は生活上の社会的地位とは別の、人生の次元に重きを置いている人が多いために比較的自殺者が少ないのかもしれない。

「メシクッタカ」ではなく「イキテルカ」が口癖になるような時代が、来て欲しくない。切羽詰ったときに、「お化けのトウさん」みたいに、ふらりと日光へ行き、また何事もなく仕事に戻るような社会が本当に豊かな社会なのではないか。愛する祖父の命日を前に、祖父はおそらく「生活」の次元はともかく「人生」の次元では、幸せだったのではないかと、思い目頭が熱くなった。